丸太のある田園

藤崎翔太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
丸太のある田園

【Ｎコード】
Ｎ９３０１Ｙ

【作者名】
藤崎翔太郎

【あらすじ】
旅に出た「私」が旅の途中で村に立ち寄って見た話

旅に出ることにした。特別な観光地や避暑地を回るわけでもない。特に目的もなく、無造作に足を進めて前にある道を歩く旅だ。旅は一年ほどで終わったのだが、その道中で私はいろいろなものを見た。

旅の途中、私はある農村に立ち寄った。

村は静かで、自然と共存していた。草の生えていない道はなく、小川は石の箱などに押し込まれてはいなかった。自然を愛する人ならば、きっとこの光景に感動したのだろう。しかし私は、昔ながらの生活を続けているこの村のこんな一面を見ても、何故だろう、例えば田舎の若者が都会に対して感じる空虚な期待、そういったものを自分も感じているのではないかと思ってしまい、結局さしたる感動もないままにその光景を受け入れてしまっていた。

しばらく村の中を歩いてみて、何か不思議な感じがした。人の気配があまりないのである。家がないわけではない。私の足取りはとても緩慢としたものであったが、それでも歩いていれば十数分ごとには必ず一軒家を見た。これだけ田舎だと、隣り合って立つ家を探すのは難しい。どうしても間に畑が挟まって、家同士は結ばれてはいなかった。

人が居ない事による異様な静かさ以外に私が感じたおかしな事といえば、畑ばかり並んで田んぼが一切なかったことだ。小川には水が満ちていて、別に水不足とかそういった事情があるわけではなさそうだ。まさかこの時代においても水田の文化が伝わっていないような未開の奥地にやってきたわけでもあるまい。私は結局自分の力ではその謎に答えを出すことは出来なかった。

答えはすぐに分かった。家を二十軒ほど過ぎて、もうそろそろ村も終わりかと思った頃に、遠くの方に一面に広がる水田の原を見た。

何だか少し明るい気持ちになって、私は歩を少し早めた。田んぼの畔には人もいた。なるほど、今は田植えの時期だったのだろう。私が心に留めていた謎は、その時は一旦喉を通って腹で消化されていった。

近づいてみると、様子が違った。人々は皆、畦道を占領するように置かれた丸太を見つめて、水田の水に浸かっている。まるで神様か、はてまたは仏様でも拝むような、そんな神妙な面持ちだった。丸太は、梁や大黒柱に使うような、大きくて立派な丸太だった。

何か不思議なものを感じた私は、それをもうちょっと近くで見ようとして、水田へ猶も近づいた。よく見ると、水田は日本の規格より大きい。畔を潰したような跡もあった。どうやら元々別れていた田んぼを一つにつなげたらしい。

人々が、動き出した。田んぼから上がって、丸太を担ぎ始めたのだ。棺でも担いでいるようにも見えた。丸太はそのまま田んぼを出て、田んぼから一番近いところに立っていた家に運ばれていく。耳を澄ませると、その家からはぽちぽちと音が聞こえてくる。焚き火でもしているのだろうか。

私は、その家に行って何をしていたのか尋ねることにした。家は、流石田舎というか、もしこれが都会にあるなら近所の人は皆この家の持ち主を素晴らしい金持ちだと思うだろう、それほど大きな家だった。それは、この村に入ってから見てきた他の家と比べても……だ。家自体がまず高台にあり、小山の裾野の先と、家を囲う線上にそれぞれ塀が建てられている。外塀は石造りの頑丈なもの、内塀は白木で作った簡素なものだった。

坂を登りながら、こんな坂をあんなにも大きな丸太を担いで登ったあの人達はさぞかし大変だったろうな、と思った。実際には坂はそれほど急ではなかったが、旅をしている途中の私は精神的にも肉体的にも、元気があるとは言えない状況だったので、何でもない坂でも疲弊し、そして簡単に弱音を吐いてしまっていた。

坂を登り切ると、ちりちりという音と共によく分からない焦げ臭

い臭いがする。やはり焚き火だったようだ。しかしあの丸太は一体何に使っているのだろう。もう少し中に入ってみてみようと思った。

火の中に、丸太が雄々しく反り立っていた。焚き火は私が思っていたよりも大きな焚き火で、人すら焼いてしまえそうなほどだった。周りを何人もの村人が囲っている。皆、笑っていた。不思議な気持ちは消えないので、近くにいた人の中で最も年をとっていそうな人に話しかけた。

「すいません私は旅をしているものなのですが、これは一体何なのでしょう」

老人の目は不気味だった。皺で瞼がだらんと垂れ下がり、髪の毛は全て抜け落ちていたが眉毛がぼうぼうに生えて、いまいち整わない様子だった。

「ねえ、すみませんが」

聞こえていなかったようなので、再度話しかけた。老人は今度は私の方を向いてくれた。そして、かかかと笑った。私は不快な気持ちを隠せなかったが、それはそれとして、再びさっきの質問をした。

老人はまたかかかと笑った。

「祭りで合っております。これは年に一度、豊穣の神様に一年の収穫を祈る祭りで、この木が燃え尽きたらみんなでごちそうを食べるのです。ですからみんなにこやかなのです」

「そうですか、それでは何故丸太を焼くのでしょうか」

「神様の木に入れないと、あの子を神様のところに運んで行けはしませんからね」

老人は、そんな事を言った。私には、訳が分からなかった。老人は、訳の分かっていない私を見ると、またかかかと笑った。

「この丸太は、一年の初めに村の奥の大きな木ばかりが立っている林から一本、森の神様から頂いてきます。木は多いので一年に一本とったくらいでは減りません。それから、その木を二つに割って、子供が入れるくらいに彫ります。そしてこの村に住む子供達の中で一番できの良かった子の首筋をちょいと切って殺すと、その中に入

れてしまいます。そうして出来た棺桶を田んぼでちょいちょいと転がして、火の中に立てて、空に飛ばします、豊穣の神様に捧げるのです。そうすれば、今年一年作物には困りません」

殺すという言葉が、他の丸太とか神様とか、そういう言葉と同じように自然に出てきたことを、私は嫌悪した。嫌悪の気持ちは隠していたつもりだったが、嫌悪感は、私の知らぬうちに外に出ていたらしい。私すら気付かぬ私の心の小さな変化を、この老人は見逃さなかった。

「あなたはおかしいと思うかも知れません。実際、この村を訪れた人はみんなそう言います。ですがですね、この村ではこれは当たり前のことなんです。親も子も、泣いてはおりません。子供は選ばれたことを喜び、大人は子供をまるで出稼ぎに旅立たせるように自らの手で殺します。笑って殺します。私達にとってこの祭事をすることは、決して悪ではないのです」

それからも老人は色々と語った。老人の話は最後まで聞いたが、最後まで私は納得することが出来なかった。結局私は理解する事はひとまず諦めて、無言でその村を去った。

村を出た頃、ふと思った。これが、村に入った頃感じた空虚な期待というものかも知れない。私は、人の死ぬのを笑いながら見送る村の人間達に狂気を感じた。だが、私がもし村の人間で、私のような外部の者が自分たちが自然にしているその事に驚いたとするならば、私はそれに対して狂気を感じるかも知れない。都会にも狂気は染みついていて、それは希望を背負って都会にやってきた多くの若者達の心を蝕んでいく。でもそれは、蝕むというよりも元々若者達が暮らしていた場所にあった狂気を、別の狂気で塗りつぶしているだけなのではないだろうか。ともすれば、狂気というのも単なる常識の一つであって、私達が日頃怖れるほどおぞましいものでもないのかも知れない。あるいは、一所に定められた常識が、最も恐ろしい狂気なのかも知れないが。

（後書き）

感想お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9301y/

丸太のある田園

2011年11月27日21時52分発行